白い暴力と極彩色の闇

White Violence / Colorful Darkness

山本聖子 Yamamoto Seiko

2015.3.3 tue.〜22 sun. 11:00〜19:00

トークイベント「対 話：山本聖子×内山幸子」
3.15sun. 16:30〜

Gallery PARC
GRAND MARBLE

2004年に大阪芸術大学を卒業、2006年に京都造形芸術大学大学院を修了した山本聖子（やまもと・せいこ／1981年・京都府生まれ）は、これまで京都・東京での個展による発表の他、国際芸術センター青森でのレジデンス（2010年）、VOCA展出品（2011年）などに精力的に取り組み、六甲ミーツ・アート芸術散歩（2011年）にて公募大賞、東京ミッドタウンプログラム：ストリートミュージアム（2011年）にてアートコンペ・グランプリを受賞するなど、その作品は高い評価を獲ています。

その代表作でもある、不動産の挟み込みチラシにある「間取り図」を丁寧に切り取り、ラミネートパウチして再度切り抜いた無数のパーツを再構成した一連の立体作品は、私たちの生活空間の無機的な画一性とともに、タテとヨコの線へと還元された「間取り図」が、なおも見せる有機的な美しさをあわせて見ることができるものです。また、2012年のGallery PARCでの個展「円の手ざわりはつるつるかざらざらか」では、その間取り図による作品のほか、「巨大な三角形が指し示す宙づりのアンパン」などによるインスタレーションを発表し、「内：外」あるいは「向こう：こっち」といった関係項に存在する「距離」「違和」「美の在り処」、そのリレーションを探るための空間を創出しました。

手による作業を重視し、その過程で素材や展示空間のディティールを確認しながら、そこに状況や空間を創出してきた山本は、本展「白い暴力と極彩色の闇」では、初の試みとして映像作品5〜6点を展示いたします。これらは山本がレジデンスプログラムにより滞在したメキシコ（2013〜14年）、オランダ（2014年）での経験と思索を基に構想されたもので、作家にとって映像による作品制作は初の試みとなるものです。

本展に際して山本が映像を表現媒体に選ぶに至ったのは、はじめて訪れた土地を手探りで知る中で、その記録としてビデオカメラをまわしたことがきっかけですが、その土地や歴史を知る中で、次第に山本の内に芽生えた疑問や違和感をテーマに、「見たもの・感じたもの」を「今」にリニアに出力し、広くリフレクション（反照）させる媒体として映像による表現が適していると考えたことが挙げられます。そして、「私の中にある明確な答えを他人に向けて表現するためのものではなく、私が世界や社会から受け取った何かをリフレクションすることで、なんらかの問いになることを期待してつくっています」として取り組まれた映像作品は、「いま・ここ」に至る山本の『解』ではなく、「こ

「白」という色には純粋や潔白などのイメージがあり、世界中で様々な場面で使用されている。しかしそういった「白」の周囲には、同時に「排除された無数の色」が存在するのではなかろうか。ひとつの「白」を生み出す過程に起こる力を「白い暴力」と名付け、それについて考えた。

" white "についての解説テキストより

1年間メキシコに住んでいたとき、彼らの文化（例えば家、伝統的衣装、民芸品、伝統的絵画など）の中に、無数の色が使われているのを見た。それらは一見、とても華やかで美しいのだが、なぜか一方で表層的にも見え、私はその無数の色の後ろに"何か黒い闇のようなもの"を感じずにはいられなかった。

" darkness "についての解説テキストより

"千里ニュータウン"という1970年の大阪万博に伴って開発されたニュータウンに育った山本聖子は、高層マンションが建ち並び、インフラの整備された街に暮らす中で、人間が生きているなら生じるであろう"手ざわり"や"におい"のようなものが全く感じられない目の前の世界が、どこを取っても無機質で、均質化しているように思えたといいます。その風景の中で、五感が麻痺し、自分自身の存在が稀薄になっていくかのように感じたという山本聖子のこれまでの作品は、その違和感への自問自答、あるいはその正体に目を凝らす中で着想されといえます。

広告チラシの間取り図を切り抜き、同系色のものを繋ぎあわせた「間取り図」の作品は、現実には様々な人の「生」が内包されているはずの「間取り図」を、単一色のタテとヨコの無機的な線へと還元するものでした。しかし、間取りを切り抜く際にはその裏面の広告や文字なども同時に切り取られるため、作品の裏面にはとりどりの色彩が溢れた、美しいカオスの様相を見ることが出来るものです。言い換えればそれは無機：有機、清浄：混沌のせめぎ合いの様であり、またその融合が見せる美しさを示すものであるとも思えます。

2013年5月〜2014年4月にかけて、ポーラ美術振興財団在外研修員としてメキシコシティに滞在した山本聖子は、その土地や歴史を知るなかで、目に見える風景の中（下）に覆い隠された「何か」を感じ、そこに違和感を覚え、いつしかそれは「白い暴力と極彩色の闇」というテーマに繋がることとなったといいます。

2012年のGallery PARCでの個展以来、3年ぶりとなる本展「白い暴力と極彩色の闇」は、山本が帰国後に本展と新作について思考する中で制作されたドローイング（思考地図）をはじめ、メキシコ滞在中に制作された作品《"white"》《"darkness"》や山本がソカロ広場でおこなったパフォーマンスの記録映像《 極彩色の闇 》、オランダ滞在時に制作された《 plastic soup 》《 オランダに山をつくる 》、帰国後に制作された《 Unconscious 》の6点の映像作品で構成されます。これらの作品は山本聖子の制作の動機でもある「"世界"と"自分"の存在を確認するため」の方法であるとともに、目に映る世界を「私にはこう見える」とリフレクションすることが、自身と「いま・ここ」を含む社会に対する「問い」になると信じて制作されたものです。

尚、会期中の3月15日16：30からは、アートマネージャーの内山幸子氏をお招きし、メキシコを中心とした山本のレジデンスでの経験や気づきを交えた「対話」によって、ここから先の見えないカタチの輪郭を探るトークイベントを開催。このトークイベントの中には、入り口部分に掲示された世界地図を用いて《 極彩色の闇 》に見られるパフォーマ

山本 聖子 / Yamamoto Seiko

"世界"と"自分"を確認する

私が幼いころから育った場所は、"千里ニュータウン"という1970年の大阪万博に伴って開発されたニュータウンだ。それは当時、"未来都市の象徴"であっただろうし、そして現在も、高層マンションが立ち並び、生活に必要とされるものは全て完備された、何不自由ない便利で美しい、落ち着いた街である。しかし私はこういった街の様相に違和感があった。人々は与えられた場所で与えられた方法で同じように生活し、"プライベート"や"個性"は極端に守られ、人間が生きているなら生じるであろう"手ざわり"のようなもの、"におい"のようなものが全く感じられないのである。目の前の世界は、どこを取っても無機質で、均質化しているように思われた。
私はそんな風景の中で、五感が麻痺し、自分自身の存在が稀薄になっていくかのように感じられた。

私の制作の根底には、このような身体への焦燥感がある。つまり、作る過程で素材のディティールを知ることや、単純作業で身体を繰り返し使うことは、私にとって"世界"と"自分"の存在を確認するための、最初の方法であったと言える。

そして今は、自分の身体そのものを世界の中に放り込み、そこで生きてみることによって、やはり同じように"世界"と"自分"を確認している。
そこから生まれる表現は、呼吸のように、あるいは風景画ように、目に映る世界や他者を反映しているに過ぎない。しかし「私にはこう見える」と晒していくことが、私を生んだ社会に対する問いになると信じている。

1981　京都府生まれ　大阪府在住
2004　大阪芸術大学芸術学部美術学科立体コース　卒業
2006　京都造形芸術大学大学院芸術研究科芸術表現専攻　修了
2013.5〜2014.4　ポーラ美術振興財団在外研修員としてメキシコシティに滞在。

■個展
2013 "からっぽの森"（ベラクルス州立ハラパ彫刻公園内ギャラリー/メキシコ）
"frames of emptiness"（見せる収蔵庫・メガアート倉庫/大阪）
2012 "円の手ざわりはつるつるかざらざらか"（ギャラリー・パルク）
2010 "the empty view" 画廊からの発言・新世代への視点2010企画（コバヤシ画廊/東京）
2009 "空の風景"（コバヤシ画廊 / 東京）
2006 "私とあなたは同時にそれを見た"（ギャラリー16/京都）

■グループ展
2014 "レジデンスプログラム成果発表展"（DORDTYART/ドルトレヒト、オランダ）
"オープンスタジオ"（OFICINA DE ARTE/メキシコシティ、メキシコ）
2013 "ボーダーレスのゆくえ"（なんばパークス内ホール/大阪）
2012 "二次元と三次元のはざま"（artspace ARTZONE/京都）
"六本木アートナイト・東京ミッドタウンプログラム ストリートミュージアム"（東京ミッドタウン内）
"日常の冒険ー現代の若手作家たちー"（札幌大通駅地下ギャラリー500m美術館）
"六甲ミーツ・アート芸術散歩2012"（六甲高山植物園/兵庫）
"第1回コンテンポラリーアート ハラパ国際会議関連企画展覧会「空虚と風景」"（ベラクルス州立大学付属AP ギャラリー/ハラパ、メキシコ）
2011 "現代美術の展望「VOCA展2011-新しい平面の作家たち-」（上野の森美術館）
"六甲ミーツ・アート芸術散歩2011"（六甲高山植物園/兵庫）
"Tokyo Midtown Award 2011"（東京ミッドタウン内）
"多摩美術大学芸術研究科展覧会設計ゼミ企画『 Drop me 』"（似て非works/横浜）
2010 "吃驚"（国際芸術センター青森）
2009 "Polyphonic."（KCPF ギャラリー/韓国・ソウル）
2007 "Xhibition"（ギャラリーRAKU/京都）
2006 京都造形芸術大学卒業制作展（京都市美術館/京都）
"第2回 P & E 展"（アートコートギャラリー/大阪）
2005 "第1回 P & E 展"（アートコートギャラリー/大阪）
"2人展「指先を待つ」オープンスタジオ"（京都造形芸術大学内）

■上映
2014.10　"Between You & Me"プロジェクト（ブレダ/オランダ）

■受賞
2011 六甲ミーツ・アート芸術散歩2011　公募大賞
Tokyo Midtown Award 2011 アートコンペ　グランプリ
2004 学長賞（大阪芸術大学卒業制作展）

■レジデンス、奨学金など
2014.7〜9　DORDTYART インターナショナルレジデンスプログラムでドルトレヒト（オランダ）に滞在。
2013.5〜2014.4　ポーラ美術振興財団在外研修員としてメキシコシティに滞在。
2010.9〜11　国際芸術センター青森　秋AIR プログラム

■レクチャー
2012 第5期建築学生同盟北海道組レクチャーシリーズにて
アートセンター中之島4117にて
2010 青森公立大学　浜田剛爾クラスにて

■パブリックコレクション
千島土地株式会社、株式会社グランマーブル

http://www.seikoyamamoto.net/

展示作品

階段部分モニター展示作品

極彩色の闇　2014　Video（55′41″）

メキシコシティ中心部のソカロ広場で行ったパフォーマンスの記録映像。
＊本パフォーマンスは3月15日開催のトークイベントにおいて、会場内で再演されます。

手摺部分スクリーン投影作品

"darkness"　2014　Video（4′00″）

1年間メキシコに住んでいたとき、彼らの文化（例えば家、伝統的衣装、民芸品、伝統的絵画など）の中に、無数の色が使われているのを見た。それらは一見、とても華やかで美しいのだが、なぜか一方で表層的にも見え、私はその無数の色の後ろに"何か黒い闇のようなもの"を感じずにはいられなかった。その理由は定かではないが、メキシコがスペインによって征服されていた時代が強く関係しているように思えた。かの有名なオクタビオ・パスが著書「孤独の迷宮」で書いているように、現代においても、様々なルーツを持ちながら彼らは「メキシコ人とは一体何か」と自分たちのアイデンティティを問い続けている。このビデオでは無数の色が落下し、混ざりあい、最初、白かった背景は黒へと変化する。使っているのは、メキシコの祝い事などに使われる紙吹雪である。

床設置スクリーン投影作品

"white"　2014　Video（4′00″）

「白」という色には純粋や潔白などのイメージがあり、世界中で様々な場面で使用されている。また日本文化においても、谷崎潤一郎著の「陰翳礼讃」や、原研哉著の「白」で書かれているように、それは独特の美しさと役割を担っている。しかしそういった「白」の周囲には、同時に「排除された無数の色」が存在するのではなかろうか。ひとつの「白」を生み出す過程に起こる力を「白い暴力」と名付け、それについて考えた。

会場中・吊りスクリーン投影作品

Unconscious　2015　Video（10′59″）

出演：池田順一・山本聖子　編集協力：麥生田兵吾　撮影協力：黄檗宗 白毫山 一様院

本展で扱っている「白」には、「良しとされた価値観」という意味が含まれている。
しかし「白」は結局のところ、見えない（実体が無い）。
それに向かって疑いも無く進む（追従する）ことは、果たしてどこへつながるだろう。

会場奥・床投影作品

plastic soup　2014　Video（26′56″）　編集協力：土井活恵

水槽に水を張り、かき混ぜ水流を起こし、そこに浮遊するフィギュアを撮影した。それぞれ線対称に見えるが、上半分は水面に映る虚像である。
本作品のタイトルはその制作方法から、チャールズ・モア、カッサンドラ・フィリップス著の「プラスチックスープの海ー北太平洋巨大ごみベルトは警告する」の表題から引用しているが、環境問題について言及するための作品ではない。

カウンター上・iPad

オランダに山をつくる　2014　Video（15′40″）　編集協力：土井活恵

「世界は神によって作られたが、オランダはオランダ人によって作られた。」という文を読んだ。
オランダのほとんどの土地が海抜0m以下に位置していることから、歴史的に風車や堤防などを駆使し海水と戦って自分たちの住む土地を生み出してきた。つまりこの一文は彼らの自負のようなものを表している。しかし私にとってこの文章は非常に衝撃的であった。なぜなら私は日本で育つ中で、台風や、土砂災害、地震、津波、火山噴火、雪害など、年中途絶えることのない日本の自然の脅威をDNAレベルにまで擦り込んでおり、自然をコントロールできるなどと考えたことなど一度も無かったからである。これはおそらく多くの日本人が同じであろうし、だからこそ八百万神などが私たちの古代宗教の中にはあり、私たちは山に向かって山の踊りを踊り、海に向かって海の歌を歌ってきたのだろう。
しかし、もしこの一文が示すように、オランダ人がオランダを、今まさに自分たちが立っているこの土地を、森を、川を、自らの手で作ったという意識があるのなら、それはおそらく自然に対する考え方や文化の発生の仕方、何から何まで私たちとは違うのではないだろうか、とそんなことを思った。
オランダには山が無い。だから私はオランダに山を作った。彼らにとってこの「山」はどのように映っているのだろうか。